

被災地の言葉（2）

「常日頃覚悟してっから」

これも被災地に支援物資を届けに行ったときのことである。対応してくれたおばちゃんに、「大変でしたね、お身内も亡くなられたんですか」と遠慮がちに聞くと、「うん。どこここの誰と誰が・・・」と言う。そして「**私ら海の仕事してんで、常日頃覚悟してっから**」と語ってくれた。そこには、この大惨事にあっても二本の足でしっかりと立っているおばちゃんの姿があった。

海と生きてきた人々にとって、海難による肉親の死は常日頃覚悟しておかねばならないことであった。これまでも三陸には何度も津波は襲来しているし、それ以上に大小の海難事故が数多く発生している。そして人々は、海で亡くなった肉親とも一緒に暮らしていると言っても過言ではない。この度の震災で2万人もの方々が亡くなったとしても、これまでの個々の事例のように、かけがえの無い、ひとつひとつの命が失われたことに変わりはない。

父ちゃんや兄ちゃんは危険と同居しながら海で漁をし、かあちゃんやばあちゃんは浜で待ち構えていて、水揚げ、選別、加工、そして生活一般の全てをやる。そしてその根底には覚悟がある。被災地では、このような威厳に満ちたおばちゃんに方々で出会ったものである。まさに男女共同参画である。

男と同じことができる女を育てるのが男女共同参画社会ではないと思う。男とは違ったかあちゃんの思いと覚悟、これを活かすことが世の中を健全にし、強靱にすることにつながるのではないだろうか。

「便利なところにあった家が皆流されたんだよね」

「便利なところにあった家が皆流されたんだよね」、高台の家に身を寄せていた女性がしみじみと言った。利便性に流され、人工物に頼りきった現代社会に対する実感である。

私の年代の人間は、母親から日頃、「戦争は絶対にやってはいけない」と子守歌のように聞かされ育ってきたものである。母親自身の戦争体験と、知人の数々の壮絶な物語による生身の実感である。“大義の無い戦争は無い”と言われるように、どの戦争にもその時々理由と大義があった。しかし、どんな理由があろうとも、社会のなりゆきがあろうとも、社会の理屈ではなく、自らの体験にてらして、生身の人間にてらして、「戦争は絶対にやってはいけない」と言うのである。

しかし、この生身で感じた教訓は、日々社会から葬り去られていく。この生身の実感とは別箇に、経済原理や政治判断、数々の利権等々、社会の理屈は利害関係者の数々の思惑により再び組み立てられていく。“人の数だけ正義がある”と言われるゆえんである。このような社会の理屈と趨勢に流されて、人々は利便性に走り、また、戦争への道を進んでいくことは歴史が教えるところである。

今被災地では、以前に輪をかけたような、人工物に頼りきった復興事業が荒れ狂っている。そしてこれらの多くは、被災地の外で、それまでの個々の地域の実情や被災者の生身の実感とは無関係に、社会の理屈で計画されたものである。これらの計画は、震災を俯瞰し、広域的かつ長期的視野で計画されたものかも知れない。しかし、いくら震災を俯瞰しても、それぞれの被災地で苦しむそれぞれの被災者の顔や事情まで見ることはできない。たといそれができたとしても、個々の被災者の心や、人間としての生身の実感まで理解することはできない。高みから見たものが正しいわけではない。これまでの戦争や、災害、公害問題がそうであったように、真実は常に被災者や被災地にあることを忘れてはいけない。震災の全体像はあくまでもこれらの真実の総体である。震災の復興は、そして原子力災害への対処は、その真実をひたすら見つめることを基本にすべきであると思う。この事を忘れれば、また我々は同じ過ちを繰り返すことになるのではないだろうか。